〈　配　点　〉

一　各２点×８＝16点

二　問一・問七　各２点×３＝６点

問五　５点　問六　４点　問三　６点

他　各３点×２＝６点

三　問一・問二　各２点×３＝６点　問五　６点

他　各３点×５＝１５点

四　各３点×６＝18点

※問六は完答。

五　各２点×６＝１２点

※問二⑴・⑵は完答。

　合計100点

〈　解　説　〉

一　漢字の読み書き

⑴　「貴」には、「たっと（い）」「とうと（い）」「たっと（ぶ）」「とうと（ぶ）」という同じ意味でさまざまな訓読みがある。「族」を「旅」と書き間違えないように注意する。

⑵　「児」には「ニ」という音読みもある。「」などの熟語がある。「童」の訓読みは「わらべ」。

⑶　「電池」のチが「池」であることに注意する。「地」と書き間違えないようにする。

⑷　「笛」の訓読みは「ふえ」。他に「警笛」などの熟語がある。

⑸　「そうまとう」とは、外側に薄い紙や布などを張り、内側にはいろいろな形を切り抜いた円筒などを立てて、中心にろうそくを置いたもの。ろうそくに火をともすと円筒が回り、張った紙や布に影絵が映って回転して見える。「走馬灯のよう」は、過去のことが次々に思い出されることのたとえとして用いられる。

⑹　「ゆうげん」とは、言葉には表しがたい、ほのかで深い美などをいう言葉。

⑺　「心地」を「ここち」と読むのは特別な読み方で、心の状態という意味。

⑻　「すいま」とは、魔物によってりに引きずり込まれるような途方もない眠さをいう言葉。

二　小説文の読解

《出典》佐川光晴「やさしく透きとおる」（『にならって』実業之日本社　二〇二三年　所収）

　作者は小説家。一九六五年生まれ。二〇〇〇年『生活の設計』で新潮新人賞を受賞しデビューする。他の受賞歴は、文芸新人賞、文学賞など。著書は他に、『おれのおばさん』『高く』『大きくなる日』などがある。

＊問題作成の都合上、文章を一部改変したところがある。

**問一**　Ａ　「鉢合わせ」には、頭と頭とがぶつかり合うことと、思いがけなく出会うことの二つの意味がある。ここでは、大学のローンでの出来事であり、短時間だが普通に話しているので、後者の意味であることがわかる。　Ｂ　「おめおめ」とは、悪いことなどをやって、それが恥ずかしいことだと自分でもわかっているはずなのに、まるで平気でいるような態度を見せること。「秘伝ともいえるガラスと金属の配合」などを書き記したノートをもらい、「銀座の画商に宛てた紹介状」までもらったのに、ガラス作りに踏み出すことができないままでいるというのは、由太郎さんの好意を無にしている恥ずかしい状況と言える。それなのに、それを恥ずかしいと思っていないかのように平気な顔で由太郎さんを尋ねていくというのは難しいと、ミカズは感じているのである。

**問二**　「まさか……思ってもみなかった」という表現からは、この状況が完全に想定外だったことがわかる。続く一文からは、「佐藤さんに渡すつもりだった手製のティーカップとコップ」を渡せないままになってしまったことへの無念さがあることもわかり、もし最後になるとわかっていれば違った行動をしていたはずなのにというミカズの心残りが読み取れる。したがって、**オ**が適切である。**ア**は、「その予想が完璧に当たったことに気づいて驚いた」が合わない。「おたがい、いま以上に忙しくなってしまう」という佐藤さんの予想については、このとき以前に「ふたりはそれきりゆっくり話す機会を持てないまま」になっていたときからすでにわかっていたことであり、いまさら驚くようなことではない。**イ**は、「佐藤さんは自分に何らかの形で連絡してくれるべきだったと失望した」が合わない。祖父の容体の急変という非常時に、佐藤さんにそのようなことを要求したいと思うような人物としてミカズはかれてはおらず、本文のどこにもそうしたむような気持ちは示されていない。**ウ**は、「土木への夢を断念して就職することにした」や「会えなくて良かった」が合わない。ミカズのガラス作りへの夢は述べられていたが、佐藤さんが「土木への夢を断念して就職することにした」ということは読み取れず、また、「会えなくて良かった」というのは「渡すつもりだった手製のティーカップとコップ」の存在とつじつまが合っていない。**エ**は、「ティーカップやコップを渡す機会は二度とないだろうと思い、彼女との交流をきっぱりとあきらめた」が合わない。このあとの内容で、ミカズがティーカップやコップをそのまま大事に持ち続けており、佐藤さんに会いたいという気持ちを持つことがあったことも述べられている。

**問三**　直前に「こんなていたらくでは」とあることに着目する。「ていたらく」とは、もともとは単に様子や状態という意味の言葉だが、現在では、胸を張れないような残念な様子や状態を表現する言葉として用いられることが多い。ミカズは自分のことを「こんなていたらく」として残念な状態にあると感じているのである。具体的には、「の研究職を続ける意欲を失っていた」ということと、由太郎さんが助力してくれていてもふんぎりがつかずにガラス作りに踏み出すことができていないことが挙げられる。「いつか自分の工房をかまえて、ガラス作りをしたい」と話した佐藤さんに、それもできず企業での仕事にも打ち込めない状況を知られるのが情けなく恥ずかしいために、「とても顔を合わせられない」のである。

**問四**　佐藤さんが泣き崩れてしまったのは、ミカズが「意識を回復した」と知ったときである。ミカズは「意識不明の重体」だったので、意識を回復したということは、とりあえずは死なないで済んだということを意味している。朝にニュースを見て「気が動転した」佐藤さんだが、母から「教員のつとめを果たしなさい」と叱られて無理に出勤している。ずっとミカズの容体を心配していたと考えられるので、意識を回復したと知って、佐藤さんは安心し、緊張が緩んで泣いてしまったのである。したがって、**エ**が適切である。**ア**は、「仕事を休んで見舞いに行くべきだったとやむ」が合わない。佐藤さんが見舞いに行かなかったせいでミカズが意識を取りもどさなかったというのなら、見舞いのことを悔やむのもわかるが、佐藤さんが見舞いに行かなくてもミカズは意識を回復したのだし、別に意識を回復する前に見舞いに行かなければならないわけではないのでつながらない。**イ**は、「教員のつとめを果たしていない自分を責める」が合わない。佐藤さんは、母から「教員のつとめを果たしなさい」と叱られて、動転しながらもちゃんと出勤している。**ウ**は、「自分が大やけどを負って全治数ヵ月の重傷であると知ったときの衝撃を思って、深く同情する」が合わない。佐藤さんが見たニュースでは「大やけどを負って全治数ヵ月」ということが報じられていたかどうかはわからず、仮に報じられていたとしても同情するのはそのニュースを知ったときであって、意識が回復したミカズの感じただろう衝撃を想像した上で今さらのように同情するというのはおかしい。**オ**は、　「会えないまま過ごした三年半の間に高まり続けてきた」「非常事態に際してえようもなく込み上げる」が合わない。「高まり続けてきた」かどうかは本文から読み取ることができず、「非常事態」というならミカズが「意識不明の重体」であるときであって、意識を回復してから「非常事態」と捉えて気持ちが込み上げるというのはおかしい。

**問五**　このあとの「わたしの話」は、佐藤さんが自分の実家のに工房を建てるから、ミカズには会社を辞めてそこでガラス作家として身を立ててほしいというもの。これは、ミカズが自分の力では工房を作ることもガラス作家になることもできないということを言っているようでもあり、それがミカズを「傷つけ」ることになることを佐藤さんは心配していたのである。そこで佐藤さんは、「いまさらふりだしから始めて……意味はないと思うの」、つまり、いまさら交際を一から始めずにすれば、自分の実家の敷地に工房を建ててそこでミカズがガラス作りをするのはおかしいことではない（ミカズに力がないせいだということにはならない）など、に「ミカズを傷つけずに済む」ような話をしようとしている。途中でミカズが話をさえぎってしまうと、こうした工夫を聞いてもらうこともなく、話が終わってしまうので、それを防ぎたかったのである。

**問六**　前で、由太郎さんが「それは、運命が決めることだからよ」と言っている。この「それ」は「会社を辞め」てガラス作りを生業とするかどうかということである。ミカズは、「こんな大ケガをする前に、自分でふんぎりをつけていたら」と悔やんでいる。大ケガをしたことで、佐藤さんにミカズを傷つけるかもしれない決断をいてしまうことになり、その前に自分自身が心を固めていれば佐藤さんにそんな負担を感じさせずに済んだという思いが込み上げたのである。佐藤さんに「たしかに、ふりだしに戻って、交際を一から始める意味はない」と言っているが、これは佐藤さんの提案を素直に受け入れるという意思表明なので、佐藤さんと結婚するということに重点があるわけではないため、「ずっと思っていた佐藤さんと結婚することを考えるとき」のような解答は正解とは言えない。

**問七**　**イ**は芥川龍之介、**ウ**は、**エ**は、**オ**はについての説明である。

三　論説文の読解

《出典》　川添愛『ヒトの言葉　機械の言葉』（ＫＡＤＯＫＡＷＡ　二〇二〇年）

　筆者は、言語学や情報科学をテーマに著作活動を行っている。主な著作に『聖者のかけら』、『数の女王』、『白と黒のとびら』などがある。

＊問題作成の都合上、文章を一部改変したところがある。

**問一**　前後の文脈をに追って考える。　Ａ　の前で、ＡＩの中身を「数（の並び）を入力したら、数（の並び）を出力する関数」と述べており、　Ａ　のあとでは、ＡＩを開発する際に必要なことは入力と出力の条件だと述べている。前の内容が理由となって、当然の結果があとで述べられているので、　Ａ　には順接の接続語である「よって」が当てはまる。　Ｂ　の前の文は「ただ……思うだけではＡＩは作れません」であり、　Ｂ　のあとの文は「としたイメージを、漠然としたまま実現することはできないわけです」である。前の内容をより詳しく言いかえて説明しているので、　Ｂ　には言いかえて説明する接続語の「つまり」が当てはまる。

**問二**　Ｃ　を含む段落で示されているのは「漠然とした」文句で示されるようなＡＩは適切ではなく、仕事が　Ｃ　されているかどうかが肝腎だということである。これは前の段落でも「漠然としたイメージを、漠然としたまま実現することはできない」として、「ＡＩにさせる課題（タスク）を定義しなくてはならない」と述べられていたことと同じである。さらにその前の段落の終わりで、ＡＩにできる○○について「その○○は、どんな仕事として定義できるのか」ということが重要だとされていたことからも、ＡＩで見極めるべき重要な点はその仕事の定義であるという主張が読み取れる。

**問三**直前の文で「このような意味で、機械学習を利用して開発されるＡＩは、どのように動作するかを完全に予測することができません」と述べられている。「このような意味」とは、その前の段落で述べられている「機械がデータの中のどのような側面に目をつけているかは明確ではなく、私たちが認識していないような意外な法則性を利用している可能性」があることを指している。ＡＩが動作の基準として身につけた法則性を人間は認識できていないというのである。法則性がわかっていれば、ある入力をすれば確実にその法則性に基づいた動作が行われることになるが、法則性がわからないので、入力に対する動作が確実にはわからないということになる。したがって、**ウ**が正解である。**ア**は「限られた数のデータしか手本にできていないために……情報を得られたとは言えない」が合わない。情報量が少ないから適切な動作ができないということではない。**イ**は「データから規則性や法則性を見いだすことは難しく」が合わない。規則性や法則性は見いだせるが、どのような規則性や法則性を見いだしたかが人間にはわからないので、それが適切かどうかが明らかでないのである。**エ**は「機械学習では本質的な規則性や法則性しかＡＩに教えることがない」が合わない。「本質的」であれば「何の問題もありません」と述べられている。**オ**は「ＡＩが身につけた法則性は仕事にとって本質的なものではない」が合わない。「本質的なもの」である可能性もあるが、人間にはそれがわからないということである。

**問四**──線②の中の「実体」というのが、何に対して言われているものなのかを確認する。直前で述べられていた「人の言葉が分かるＡＩ」や「人の心が分かるＡＩ」に対して、実体はそうではなく、単に雑談ができたり、質問に答えることができたり、感情を示すことができたりするだけだということである。それらのことができるからといって、言葉や心が分かっているということにはならないということを示している。

**問五**　ここまでの内容で、筆者は「たとえ人間にとっては似たような仕事であっても、ＡＩにさせる場合は『まったくの別もの』である可能性がある」など、や要約、会話などをＡＩがする場合、目に見える結果は同じでも、やり方はＡＩと人間でまるで異なっているかもしれないと述べている。表面上は同じに見えても、内実はまったく違うので、「真似」でしかなく、「近似」でしかないというのである。

**問六**　直後に「たとえば」とあるので、そこから始まる内容が具体的な例になっている。入力された「This is a pen.」などの英文を日本語文にして出力するという機械翻訳システムの場合、正しい日本語訳を出力できれば目的は達成できるが、どのようにして翻訳がされているかをＡＩの中身を見て知ろうとしても、「どのように計算されるか、またその計算の結果が出力に向かってどのように伝わっていくか」はわかるが、それは人間にとっては単なる「数の計算」であり、「原文のどの部分が訳文のどの部分にどのように反映されているのか」というようなことは知ることができないのである。したがって、**オ**が正解となる。**ア**は「新しく優れた法則」といった人間の法則と比較した価値基準で述べられているわけではないので不適切。**イ**は「ＡＩは人間を超えた存在に成長していく」が、**ウ**は「ＡＩは互いに独自の言語を用いて通信し合い」が、**エ**は「とても処理できる量ではなくなっている」が本文に書かれている内容と合わない。

**問七**　直後で「今のＡＩは私たちが想定していないような間違いをします」と述べた上で、「中身がよく分からないということは、ＡＩが間違いを起こした場合に原因を突き止めることが難しく、改善点を見つけるのも難しいということを意味します」と問題点を指摘している。続く「こういったことは、人々の健康や安全、経済的・社会的な利益に関わるような部分に技術を応用するときに大きなハードルになります」も問題点と言えるが、前者から派生するものなので、直接の問題点は前者であり、これをまとめる。

**問八**　**ア**は「１００％正しく動く保証がなければ販売すべきではない」が合わない。筆者は「商品として出荷する前のテストでは十分な精度が出ていたとしても、お客さんの手元でお客さんが与える入力に対して同じような精度が出るとは限りません」「ＡＩが社会一般に浸透するには、このような事実が広く認識される必要がある」とは述べているが、「販売すべきではない」といった規制を考えてはいない。**イ**は「『ＡＩは人間以上に進化した存在と言えますか？』ということになり」が合わない。筆者への質問はいずれも、ＡＩが人間と同じことができるかというものであって、人間を超えたことができるかという質問ではない。**ウ**は「ある意味では危険をともなっていると考えられ」「できるだけ行わない方がよい」が合わない。深層学習に危険性があるとは述べられていない。**エ**は「『機械学習によって作られたＡＩは、人間がすべてプログラムして作ったＡＩより融通が利くはず』という意見を見たこともありますが……必ずしも『本来想定していない使われ方をされても大丈夫』ということを意味しません。こういった点にも注意が必要です」という内容と合っている。**オ**は「一部の研究者からの反対によって、『説明可能ＡＩ』の開発は遅れている」が合わない。疑問視する声も上がってはいるが、反対意見があるとは述べられておらず、開発の遅れにも言及されてはいない。

四　古文の読解

《出典》『宇治拾遺物語』

　『宇治拾遺物語』とは、時代の初期に成立したとされる説話集で、貴族説話、仏教説話、民間説話などが収められている。

**問一**　Ｃの「の」は「が」に言いかえられる主語を表す意味の「の」。現代語の「ぼくの書いた文章」で、「ぼくの」の「の」を「が」に言いかえて「僕が書いた文章」にできるのと同じである。他の「の」は「が」に言いかえられないので主語を表す意味ではない。

**問二**　このあとの実際の元輔の行動から判断できる。このあと元輔は、君達に対して長々と演説をしている。

**問三**　間違いを指摘し、そのあともを並べたり例を挙げたりひたすら話し続けている様子から判断する。最後の方で馬添の問いかけに対して「道理をいひ聞かせ」たと言っていることもヒントになる。

**問四** 「冠を持って来い」と馬添に言い、持ってきた馬添から冠を受け取って、そこに頭を差し入れた人なので、元輔である。

**問五**　前にさかのぼっていくと、「馬添の曰く、」というせりふの始まりを示す部分があるので、その直後からせりふが始まっていることが分かる。

**問六**　**イ**のようなことは元輔の話の中に出てきていない。**エ**は、「今回の事態は馬が悪いのでも元輔自身が悪いのでもなく」までは話の中に出てきており、石ででこぼこしている通りの不便さにも言及していたが、それが問題なのだと主張していたわけではない。

〈現代語訳〉

君達が「ああ大変だ」と見ているうちに、とてもすばやく起きあがったところ、冠が脱げてしまった。髻が全然ない。ただ素焼きの瓶をかぶっているようであった。

馬添が、うろたえて、冠を取ってかぶせようとするが、（元輔は）頭の後ろの方へ押しやって、「ああ騒がしい。しばらく待て。君達に申し上げたいことがある」と言って、殿上人たちの車の前に歩み寄る。日が射していたので頭がきらきらと光って、とても見苦しい。大路を埋めた者たちが、大勢集まって笑って大騒ぎをしている。車に乗った者、桟敷で見物している者たちが笑い騒ぐが、（元輔は）一つの車の方に歩み寄って言うことには、「君達は、この馬から落ちて冠を落としたことを、おろかだと思われるか。それは間違いである。それは、深い人でさえも、物につまづいて倒れる事は常にあることだ。まして馬は分別があるものではない。この大路はたいそう石が出てごつごつしている。馬は口をで引っ張られているので、歩こうとしても歩けないのだ。ああ引きこう引きして、ぐるぐると引き回すから、倒れそうになるのだ。馬を悪いと思うべきではない。唐鞍は平べったく鐙には足のかけようがない。そのうえに、馬がひどくつまづいたので落ちたのだ。それはみっともないことではない。また冠が落ちたのは、ひもなどで結びつけておくものではなく、髪をよくかき入れて留められているものなのだ。それなのに鬢がなくなっているので、まったくない。それなら落ちることがあっても、冠を恨むべきではない。また例がないわけでもない。なにがしの大臣は大嘗会の御禊で落とした。なにがしの中納言はその時の行幸で落とした。このように例も数え上げたらきりがない。だから、事情もご存じない近頃の若い君達は、お笑いなさるべきではない。お笑いなさることはおろかなことだ」と言って、車ごとに指を折って数えながら言い聞かせる。

このように言い終わって、「冠を持って来い」と言って受け取って頭を差し入れる。その時に、どっと声があがって限りなく大騒ぎして笑う。冠をかぶらせようとして、馬添が言うには、「落ちなさってすぐ冠をされずに、どうしてこのようにつまらない事をおっしゃっていたのか」と尋ねると、「ばかなことを言うな。このように道理を言い聞かせたからこそ、この君達は後々にも笑わないだろう。そうでなければ、口さがない君達はいつまでも笑いの種にするだろうに」と言った。（元輔は）人を笑わせるようなことをよく言う人なのであった。

五　文法

**問一** 「どう」は直下の「いっ」という動詞（用言）をしており、活用がない自立語なので副詞である。

**問二**　動詞の活用の種類を見分けるには、打ち消しの助動詞「ない」に接続する未然形に着目する。⑴の「叱ろう」の「叱ろ」は、「叱らない」のように「ない」にア段で接続するので、五段活用である。また、五段活用で活用語尾が「叱ろ」とオ段になるのは未然形だけなので、活用形も決まる。⑵の「いたかった」の「い」は、この形のまま「いない」のように「ない」にイ段で接続するので、上一段活用である。上一段活用では五段活用と異なり、活用が未然形と連用形で同じ形なので、直下に何が来ているかで活用形を判断する必要がある。直下の「たかっ」は助動詞「たい」が活用したもので、「たい」に接続するのは連用形である。

**問三**　「不意に」どうしたのかを考える。また、「いつのことだっただろうか、真冬の晴れ渡った空を、勤務していた会社の通用口のドアに手をかけようとしたときに不意に思い出したことがあった。」のように、「思い出した」の直前に「不意に」を移動させてみても元の文と意味が変わらないので、「思い出した」にかかることが確認できる。

**問四** 「信じられない」の「ない」は、「信じられぬ」「信じられず」のように言いかえられるので、助動詞の「ない」である。同じように言いかえられるエが正解。ア、イ、ウは形容詞の「ない」で、特にウは上の「小さく」と補助の関係になっているので補助形容詞である。また、オは「あぶない」という形容詞の一部形である。

**問五**一文節に、必ず自立語が一つ入るので、文節の数を数えれば、それが答えになる。この文は「来年に／なったら／他県に／引っ越す／ことが／すでに／決まって／いた。」の八文節に分けられる。自立語は「来年（名詞）」「なっ（動詞）」「他県（名詞）」「引っ越す（動詞）」「こと（名詞）」「すでに（副詞）」「決まっ（動詞）」「い（（動詞）」である。